

学校経営 ビジョン	学校経営ビジョンキーワード:「みんなで(協同)、まえへ(自立)、つながる(連携)コロナプラスの三松っ子に!」 夢の実現に向けて、「対話」を軸に、協同・自立し、仲間とともに高め合う児童を育成する。『協同』『自立』		4段階評価 4 期待以上 3 ほぼ期待どおり 2 やや期待を下回る 1 改善を要する		
項目	本年度の重点目標と 目標達成のための手段	結果の考察・分析及び改善策等(○成果・●課題・☆改善策)	自己 評価	関係者評価	学校関係者評価のコメント
知育	重点目標：基礎・基本の確 実な定着及び思考力・判 断力・表現力等の向上 ■手段 1 基礎・基本の定着 2 読解力・思考力・表現 力等の 育成 3 授業力の向上	●週3回朝10分間実施している「ぐんぐんタイム」は、コロナ禍における健康管理のため、毎朝の丁寧な健康観察や児童の体温チェックを行ったため、時間確保が難しい状況にあった。 ☆「ぐんぐんタイム」として設定していた時間の有効活用について、校時程の変更も検討する。 ○学力調査関係は、すべて予定どおり実施することができた。 ●学力調査における課題「問題をじっくり読むことや解答速度に課題のある児童もいる」が明らかになった。 ○三松メソッドを意識した授業実践が進められた。 ○図書貸出数の増加(前年度比1143冊増(参考:10~1月調べ)が見られた ○職員の読書活動の積極的な推進について、2.9ポイントから3.2に上昇。 ○家庭での読書に関する保護者評価も1.4ポイントから2.ポイントに上昇した。 ○朝の時間を使った保護者による読み聞かせについて、コロナ禍で中止していたが10月より再開。12月にはクリスマス読書会も実施していただき好評であった。 ○表現力向上のためにを行っている新聞作文欄への投稿に関する教員自己評価が1.9ポイントから2.2ポイントへ上昇した。年間3名の作文が掲載されている。(1月末現在) ○年間3回の重点支援校訪問を実施し、南部教育事務所及び小林市教育委員会指導主事による授業に関する個別のFBを生かした授業改善を行うことができた。 ○高学年における一部教科担任制については、第6学年(2学級)担任は、図画工作と家庭科で実施することができた。 ●授業時数調整の課題や新型コロナウイルス感染症・季節性インフルエンザ等の感染予防の観点から、第5学年(3学級)での実施が困難であった。 ☆次年度は今年度の課題を整理、児童への教育的効果が上がる最善の方法を検討する。	2.9	3.3	○コロナ禍の中、色々と制約もある中で、個々の児童への配慮した指導を様々な所で感じる。 ○コロナ禍の健康観察は重要な毎日の実行事項。大切なことに時間を使ったのですからこの時間のために「ぐんぐんタイム」の成果が得られなかったと考える必要はないと思う。 ○反省を踏まえた校時程の改善が行われるのはよいと思う。(ぐんぐんタイムや給食時間の位置づけなど) ○反省を踏まえ、良い方法を常に模索し実践につなげる努力に頭が下がる。 ○校時程の変更も検討していただき、前向きな運営を進めてくださっていることに感謝いたします。 ○学力調査における課題「問題の読み」については、大学入試でも指摘されていた。意図的に長文を読む機会を設ける等、図書指導で行う必要があるかもしれない。 ○図書貸出冊数は増加しているが、学力調査における課題が読解力、読むスピードにあるとすれば、冊数だけを追っていても改善が図れない。読んで考える力、例えば「なぜなぜ」運動脳を取り入れて移動しながら謎解きをする等、ゲーム感覚で子どもの意欲を引き出すことが大切である。 ○三松メソッドの目標である「助け合い・教え合い・練り合い」はコミュニケーション能力の育成にもつながる。重点支援校訪問を受け、行った授業改善で培った資質が子ども達にも良い影響を与えるので、前向きな取組を応援する。 ○外部講師を招聘した授業でお礼だけに終わらず、授業を振り返り、内容をどう理解したかを自分の言葉で伝える機会を設けることは、表現力やコミュニケーション能力の育成に役立ち、「まどめ」の質も高まると思う。 ○与えられたことをするだけでなく「何のために」を考え「学びたい」気持ちを高め、チャレンジ精神を身に付ける教育に期待する。 ○学力調査の数値が気になると思うが、一人一人の課題やよさに目を向け、子ども達が何かひとつでも自信をもってよりよく未来を生きていく力をつけてほしい。 ○KSSVCの取材でも多くの授業や活動を見せていただく機会があり、子ども達の積極的な取組とそれを支える先生方の熱意をいつも感じている。特にタブレットやオンラインなどITを活用した授業が増え、内容も徐々に充実していると感じている。技術革新が進む中、先生方も新たな技術の習得が大変だと思う。 ○タブレットを活用した授業が心に残った。今までと違った準備を必要としていると思うが、共有できる部分をうまく利用して先生方の負担を分担できいいと思う。 ○タブレットの有効活用も評価できる。今後もしきめ細やかな指導を行い学力向上に努めていただきたい。
徳育	重点目標：自他の存在、き まり、礼儀の尊重及び豊 かな 心の育成 ■手段 1 基本的な生活習慣の定 着 2 豊かな心の育成 3 いじめや不登校の早期 発見・ 早期対応	○挨拶・返事に関する意識は、職員・保護者ともに、上昇傾向にある。 ☆挨拶について、継続指導していく。 ●ボランティアに関する職員評価は前期・後期で伸びが見られず、職員も一緒に実践する等工夫が必要である。 ●みまつ会議の充実にも努める必要がある。(☆次年度は、校時程等の工夫により、2週間1回実施できるようにする。) ○日々の観察に加え、毎月の悩みアンケートやQU調査の実施により児童理解に努めた。 ○不登校児童や不登校傾向児童への対応については、保護者や関係機関との連携を密に行う 等、解決に向けた取組を進めてきた。 ☆第2回のQU調査結果分析を行ったり、組織対応ができるよう校内の協力体制の整備と関係機関との連携強化に努める。 ○SNSに関する指導について、非行防止教室や学校保健委員会(家庭教育学級との共同開催)を活用し、児童や保護者対象とした外部講師を招へいた学びの機会を設定し、意識の向上に努めた。	2.9	3.3	○コロナ禍の中で、挨拶に元気がない。大きな声が出せずに心まで縮こまってしまったようだ。「挨拶は元気よくしましょ」という挨拶運動の復活を期待する。 ○挨拶・返事の意識は職員・保護者ともに上昇傾向との分析結果をうれしく思う。挨拶はコミュニケーションの基本でお互いの元気の源。不審者への不安もあり、誰にでも挨拶をするのがはばかれる時代。指導の塩梅が難しいが地域住民として、子ども達との挨拶から生まれる交流を楽しみにしている。 ○挨拶名人、椅子入れグランプリ、スリッパ並べ大賞等いつもの行動が評価される場面があってもよいのかなと思います。 ○キャリア教育の講師がよく言われたのが「(SNSでない)対面のコミュニケーション能力」の大切さ。みまつ会議を参観した折、どの学級でも活発な話し合いが行われており「低学年でも話し合い活動は十分成立する」とその時確信した。相手の立場や気持ち、自分の気持ちが理解でき、自分のことをわかりやすく伝えられる子ども達が増えてほしいと願う。その為にも一人ひとりが自分の考えを口に出せる集団づくりが大切だと思う。QU調査に基づいた児童理解と指導、みまつ会議の充実を期待している。 ○QU調査の満足度が向上していることは好ましい。マズローの欲求階層説によると「できるようになりたい(自己実現欲求)」「ほめられたい(承認欲求)」「みんなと一緒にいたい(社会的欲求)」「いじめられたくない(安全・安心欲求)」「働きたい(生理的欲求)」がある。すべてでなくても、自分の欲求が満たされる子どもは学校が楽しくなるのではないか。 ○不登校傾向の児童への対応。本人ももちろんだが、保護者の不安も大きいと思う。学校への相談等、更にしやすいような工夫を望む。 ○日常生活の中での子どもの不登校、いじめゼロは厳しいと思われるが、家庭訪問、関係機関との連携を図りながら、解決に向けた取組を進めていただきたい。 ○落ち葉掃きや花の水やりなどの光景に元気をもらおう。子ども達が活動の意義を理解し、自分で考えて行動するようになれば大成功。そのための「仕掛け(作戦)」を考えるのも教師の役目だと思う。 ○おやじ学級主催の田植えなど地域との創意工夫を生かした特色ある学校づくりを進めてもらいたい。 ○本来、家庭で担うべき役割を学校側に依存しているのではないかと感じる。家庭への介入も難しく、授業参観には参加しても懇談会には出席しない保護者も多いと思う。PTA組織存続についても否定的な意見もあるが、学校と家庭を繋ぐ重要な役割があると考え。持ちつ持たれつで良好な関係が続くことを願います。 ○SNSの使い方、利便性と危険性を知ることは、子どもも親もそれぞれ学ぶべき時代になっているようだ。

学校経営 ビジョン		学校経営ビジョンキーワード:「みんなで(協同)、まえへ(自立)、つながる(連携)コロナプラスの三松っ子に! 夢の実現に向けて、「対話」を軸に、協同・自立し、仲間とともに高め合う児童を育成する。			
項目	本年度の重点目標と 目標達成のための手段	結果の考察	自己評価	関係者評価	学校関係者評価のコメント
体育・ 食育	<p>重点目標:基礎体力、食育推進及び望ましい健康生活習慣の定着</p> <p>■手段</p> <p>1 基礎体力及び運動能力の向</p> <p>2 保健指導の充実・病気の予防と治療率向上</p> <p>3 家庭と連携した基本的な生活習慣の定着及び食育の推進</p>	<p>○基礎体力向上を図る運動についての教員自己評価は0.2ポイント上昇した</p> <p>○体力向上に向けた工夫改善についても0.3ポイント上昇した。コロナ禍における行動制限が少しずつ緩和されたことによる運動機会の増加が関係していると思われるが、(☆今後も職員間で体力向上に効果的な運動についての情報交換を活発に行っていく。)</p> <p>○う歯治療を保護者へ啓発しており、治療率75%である。(1月末現在)今後も啓発を継続していく。</p> <p>●朝ご飯の摂取率調査を1月に実施予定であったが新型コロナウイルス感染症と季節性インフルエンザの同時流行による出席停止者の増加により、正確なデータが得られないとの判断から実施を見送った。</p> <p>○弁当の日を2回実施した。3月のお別れ遠足で3回目の「食育の日」を実施する予定である。</p> <p>○食事のマナー(正しい箸の持ち方等)についての保護者評価が前期・後期で0.5ポイント上昇している。</p>	2.8	3.3	<p>○声を出して外で走り回って運動する、遊ぶことがようやく思い切りできるようになったのでしょうか。できなかった3年間を取り戻すのは容易ではないが、少しでも回復傾向にあり、よかった。</p> <p>○体力の向上だけではなく、脳の働きや学力とも関連付けた資料と説明が参考になりました。学校の自己評価もポイントが上がっていますので、成果に注目している。</p> <p>○基礎体力向上を図るための三松サーキット(ストレッチ運動)は、成長してからのケガ防止にもつながるので、体力向上プランに基づき、体育の指導を行っていただきたい。</p> <p>○コロナ禍の中で子ども達が思い切って動く機会が奪われ、体育の授業にも苦労されたと思う。そんな中で体力向上のための工夫改善が見られたことを評価する。</p> <p>○歩いて自力登校しない子どもが増えていることが気になる。「歩く」ということが子ども達の体・頭・心にどんな影響を与えているのかを子どもにも保護者にももっと理解してほしいし、家庭への啓発も必要と思われる。歩いて登校している子どもに声かけをし、褒めていくことで歩いてくる子どもを増やしましょう。このことが体力向上、特に持久力の向上につながると確信している。子どもの時代の1年間は大人の時代の5年分に相当すると言われ、それほど体も頭も心も成長するとき。伸びるときに体を動かさないと体も頭も心も成長しないのはもったいないことだ。歩いての自力登校についてはPTAとも協議してみたらどうか。朝の送迎の車のラッシュ、運動場の荒れも気になる。</p> <p>○う歯治療率の高さに毎回驚いている。望ましい結果は、学校での指導と家庭への依頼に加え、それに応える家庭の協力がなければ生まれない。協力的な家庭の力は他の面でも十分に生かされるだろうし、それが地域づくりにもつながると思う。</p> <p>○う歯治療は、90%達成に向けて啓発をお願いしたい。子どもが自発的にできることではないので学校からの啓発が不可欠だと思う。</p> <p>○朝ごはん、弁当の日、食事のマナー(正しい箸の持ち方)等、先生方が丁寧に指導されているのが調査結果からよく分かる。一つひとつは小さなことでも、他の指導と関連づけ、続けることで大きな成果が生まれることだろう。</p> <p>○朝食摂取調査については、実施結果に基づく対策も考えていただきたい。</p> <p>○箸の持ち方等の評価も上がっているようなので、引き続き低学年の「えんぴつを正しく持つための練習具」の使用を定着させていきたいと思う。</p>
特別 支援 教育	<p>重点目標:特別支援教育の充実</p> <p>■手段</p> <p>1 学校全体で取り組む支援体制「全ての教職員が取り組む特別支援教育」</p> <p>2 特別支援学級児童に係る交流 学級と協同した支援</p> <p>3 就学指導の計画的実施</p>	<p>○校内研修の充実を図り、全職員が児童の個別最適な学びを意識した指導や配慮について学ぶ機会を設けた。</p> <p>●職員の児童理解や対応力等の特別支援教育力の向上に努める必要がある。</p> <p>☆校内研修の充実、オンライン講座等の有効活用による学びの機会を確保し、スキル向上を目指す。</p> <p>○特別支援教育支援員による個別の支援の充実を図るため、個別的教育支援計画・指導計画の作成や活用の充実と併せた配置計画を特別支援教育部の担当者を中心に行った。</p> <p>○校内支援体制の整備を特別支援教育コーディネーターが相談窓口となり進めていった。また、関係機関(教育と福祉の連携)、小林小学校に在籍しているエリアコーディネーターや小林中学校に在籍しているエリアメンター、小林こすもす支援学校のチーフコーディネーターからの助言も有効活用した。</p> <p>○コロナ禍において中止していた居住地校交流を再開。3名中1名のみ実施できた。今後は、小林こすもす支援学校と連携しながら状況に応じて交流及び協同学習の充実に努める。</p> <p>○特別支援学級児童の実態を交流学級担任も把握し、協同・一貫した指導・配慮が行えるようにした。☆情報交換の機会を増やし、さらに連携強化することで児童のよりよい成長と適応を高めていく。</p> <p>○就学指導については、行動観察→結果分析→指導や配慮方法の提案(保護者面談)の流れを作り、計画的に行った。</p>	3.3	3.8	<p>○目標の「全ての教職員が取り組む特別支援教育」という言葉が大好き。実現のためには、学級や学年、担当の垣根を越えて子ども達を支え、学校全体の状況を把握し、それぞれの教職員が自分にできることを考えて対処することが求められる。このことは生徒指導を始め、様々な領域で生かされる。一人の教職員に負担をかけず、孤立させない取組。このことがまさに「働き方改革」だと思う。</p> <p>○「特別」な子どものために「特別」な教育をという特別な教育観をなくして、子ども一人一人の個性に応じた支援をしていこうという経営が素晴らしい。</p> <p>○全職員で研修を行い、共通理解を図ったり、関係機関と連携したり、他校との交流や協同学習等、積極的な取組が行われていることを評価する。「つながり」の強化。</p> <p>○「未来は多様であれ」と願う。いろいろな考え方、いろいろな生き方が尊重される時代になってほしい。</p> <p>○校内支援体制はもとより、関係機関との連携や助言を活用し、よく取り組んでいただいていると思う。</p> <p>○居住地校交流が再開されたとのことで、よかった。いろいろな学びが双方にとってあったことだと確信する。</p> <p>○地域の特別支援学校児童との交流。素晴らしいことだと思う。この活動から児童も地域への関心を広げていけるとよい。小学校就学前に不安を抱える保護者(特に発達等について)も増えているように感じる。幼保認ごとの連携の中での情報交換や相談しやすい環境を充実させてもらえるとよい。</p> <p>○支援を必要とする子どもが増加しているにも関わらず、体制が整っていないと感じます。専門職の先生はもちろん、経験豊富で支援の当事者でもある「親の会」の方にお話を聞くのも勉強になるのではないかな。</p> <p>○関係機関、エリアコーディネーターやエリアメンター、チーフコーディネーター等からの助言をあおぎながら、居住地交流を行い、小林こすもす支援学校と連携しながら、特別支援教育の充実に努めていただきたい。</p>
次年度の方向性についての校長所見	<p>1 『Have to』から『Want to』へ、働く・学ぶ意味を「対話」により明確にし、『わくわく』が溢れる三松小を目指します。</p> <p>2 学校教育目標の実現に向け、「対話」を軸に、「つながり」を大切にされた教育活動を推進します。</p> <p>3 一人一人の夢の実現に向けて「対話」を軸に、「協同・自立」し、仲間とともに高め合う教育活動を推進します。</p> <p>4 家庭・地域との「つながり」を大切にされた地域コミュニティーの核としての学校づくりを推進します。</p>				